タグ付け作業による意識の変化とツールを使用したユーザーの感想

浜谷佐和子

はじめに

日本の大学・大学院においてアカデミック・ライティングの重要性が認識されており，本研究においてタグ付けを担当した数名の大学院生が在籍する，関西大学外国語教育学研究科でもアカデミック・ライティングという講座が設置されている。この講座は修士論文執筆のための実践的な講座であり，多くの学生が受講する。本研究のタグ付け担当者もやはりほとんどが受講済みであった。したがって，作業開始時にムーブの知識が全くなかったわけではない。しかし，論文を読みながら表 1 に示すエクセルのタグ付け表に論文の該当部分をコピーペーストするという作業を繰り返し行うことによって学生の意識に様々な変化が起こったようである。また，実際の論文執筆に際して AWSuM を使用した感想を聞いた結果からは，英語で論文を執筆することに対する抵抗感の低下が見られた。AWSuM の使用は講座を受講するのとはまた異なる効果があることを示唆している。

1. タグ付けによる学生の意識の変化

1.1 参加者

外国語教育学の博士課程前期・後期に在籍する学生 8 名。

1.2 手順

実際のタグ付け作業は，以下のような手順で行われた。

- 当該ジャーナルの論文掲載ページにアクセスし, HTML のページを開く。
- エクセルのタグ付け表 (Pho, 2013 に基づく) を開く。
- タグ付け表の <info> に論文の情報をタイプあるいはコピーペーストする。
- <abstract> から <conclusion> まで，論文を読みながら上から順に論文の該当部分をエクセルの該当セルにコピーペーストしていく。そのさい，研究代表者（水本）が作成したタグ付けのサンプルと表 1 のタグ付け表の各ステップ “Steps”の特徴を参考にする。

表1

コーパスのタグ付けに使用したムーブ一覧

Sections	Moves	Steps
Abstract	[01] Introduction (Establishes context of the paper)	・Arguing for topic prominence (Claiming centrality) ・Making topic generalizations ・Defining terms, objects, or processes ・Identifying a gap in current knowledge ・Justifying the research study
	[02] Presenting the research	・Stating the purpose directly
	[03] Describing the methodology	・Describing the participants ・Describing the instruments or equipment ・Describing the procedure and conditions
	[04] Summarizing the findings	・Describing the main features or properties of the solution or product
	[05] Discussing the research (Interprets or extends results beyond the scope of the paper, draws inferences, points to applications, or wider applications.)	・Deducing conclusions from results ・Evaluating value of the research ・Presenting recommendations
Introduction	[06] Establishing a territory (Announcing the importance of the field)	・Claiming the centrality of the topic ・Making topic generalizations ・Summarizing existing studies (Reviewing items of previous research) ・Drawing inferences from previous studies ・Reference to main research problems
	[07] Establishing a niche (Preparing for the present study)	・Indicating a gap ・Adding to what is known ・Presenting positive justification ・Raising a question
	[08] Presenting the present work (Introducing the present study)	・Announcing present research descriptively and/or purposively ・Stating purpose(s) ・Presenting research questions or hypotheses ・Definitional clarifications ・Reference to main research procedure (Summarizing methods) ・Predicting results (Announcing principal outcomes) ・Stating the value of the present research ・Indicating RA (Research Article) structure
Method	[09] Describing the sample [10] Describing research instruments [11] Describing the procedures [12] Describing data analysis procedure	
Results (or Results & Discussion)	[13] Preparing for the presentation of results	・(Re)stating data collection and analysis procedure ・Restating research questions or hypotheses
	[14] Reporting specific / individual results	・Location of results ・Reporting most important findings ・Substantiating (or invalidating) results ・Indicating non-consistent observations
	[15] Commenting on results	・Interpreting results
	[16] Summarizing results	・Presenting integrated results on the basis of a number of specific results
Discussion (or Conclusion)	[17] Preparing for the presentation of the discussion section	・Giving background information (Restate the aims, objectives, procedural information, theories, and research questions)
	[18] Highlighting overall research outcome	・Reporting results (Expected or unexpected outcome)
	[19] Discussing the findings of the study	・Interpreting / discussing results ・Indicating significance of the outcome ・Comparing results with a hypothesis ・Comparing results with literature ・Exemplifying
	[20] Drawing conclusions of the study Stating research conclusions	
	[21] Evaluating the study	・Indicating significance / advantage ・Indicating limitations ・Evaluating methodology
	[22] Deductions from the research	・Recommending further research ・Making suggestions / drawing (pedagogic) implications
Conclusion (or Pedagogical implications)	[23] Summarizing the study	・Providing summary
	[24] Evaluating the study	・Indicating significance / advantage ・Indicating limitations ・Evaluating methodology
	[25] Deductions from the research	・Recommending further research ・Making suggestions / drawing (pedagogic) implications

タグ付けの作業中に同定上の問題があった場合は，リサーチアシスタントである著者，そして研究代表者と協議の上調整を行った。論文のある部分が 2 つ以上のムーブやステップに当てはまる場合は，そのテキストが担う主な役割で分類し，2 つ以上のセルに重複してタグ付けしないようにした。また，あるステップに該当する部分がないと思われる場合は該当するセルは空欄のままにした。ジャーナルによってはムーブやステップに従わず，かなり自由な形式を採った論文も見受けられ，こうした論文はタグ付け対象からは外した。このようにして，2015 年春から 2016 年冬にかけて応用言語学分野の主要なジャーナルから約 1,200 の論文を選択しタグ付けを行った。

作業後，参加者に質問紙（付録）を用いてインタビューを行った。インタビュー内容はデジタルレコーダーに録音し，書き起こしおよびコーディングを行った。

1.3　結果

回答の内容を，ムーブのタグ付け作業をすることによって (a) ムーブの知識が定着して起きたと考えられるもの，(b) 語連鎖の知識が定着して起きたと考えられるもの，(c) 論文の多量なインプットによって起きたと考えられるもの，そして (d) 情意面における変化の 4 つに分類した。ほとんどの参加者が英文の読み方が変わったと答えている。

ムーブの知識の定着による影響としては，

・英文を読む際にまず全体に目を通してから読む。

・全体の構成を把握してから読む。

・ムーブ・ステップの区切りを見つけるようにしながら読む。

などのようなものがあった。語連鎖 の知識の定着による影響としては，

・パラグラフの初めのフレーズに注目して読む。

・各ムーブ・ステップに特徴的な表現を探しながら読む。

などがあげられる。

また，ほぼ全員が，読解速度が上がったと答えているが，これは作業効率（時間制限）を意識しながら論文を多量に読んだことによるものと考えられる (Chang, 2010)。日本語を読む速度も上がったと答えた者がいたが，これについては調査が必要であろう。

ムーブおよび語連鎖の知識の定着，大量の読解，両面から影響を受けたものとして情意面に関して，

・比較的難しい文章に慣れたため易しい文章の読解が速くなった。

・長い論文に対する抵抗感がなくなった。

・わからない部分があっても全部を理解しようとせず図表などを参考にわかるところから読むようになった。

というような変化が見られた。

タグ付け作業による影響は読み手としての意識にとどまらず，書き手としての意識にも

及んだようだ。この変化はさらに (a) 書き手自身に向けられたものと (b) 読み手に向けられたものに分けることができた。書き手自身に向けられた変化として，

・ムーブの知識を得たことで論文を書くことに抵抗が少なくなった。

・（論文を書く際）直接引用のようになりがちだが頻出のフレーズを使えると楽になりそうだ。

などがあった。さらに，読み手へ向けられたものとしては

・読み手に伝わるよう書こうと思う（ムーブ に従った方がよく伝わる)。

・修士論文を書く際にムーブの考えを取り入れ，（読み手に）必要な情報を与えるようにする。

のようなものがあげられる。

文章の形式を重視することには賛否両論があるが，本研究の作業後のインタビュー結果からは，多量の論文を読みながら，文章を各ムーブ・ステップに区分けしていくという作業の繰り返すことによって，内容を効率的に把握するための読み方が定着し，さらには効果的な書き方に対する意識が高まったと言える。日本人学生が英語で書かれた論文を読み書きする際には，速度が遅いという壁が立ちはだかる。この壁を低くするための活動の一つとしてムーブ・ステップ表を参照しながら多くの論文を読むという方法も考えられるだろう。

2. AWSuM を論文執筆に使用した学生の感想

2.1 参加者

外国語教育学研究科修士課程に在籍する学生 2 名，人文社会学部に属する学生 10 名

2.2 手順

大学院生は，AWSuM を使用して修士論文を執筆しながら気づいたことを記録した。大学生は，卒業論文執筆時に AWSuM を使用し，その後アンケート用紙に良いと思ったこと，改善したらよいと思ったこと，その他の感想を記入した。

2.3 結果

大学院生・大学生からさまざまな意見が寄せられたが，AUSuM のサジェスト内容については，おおむね肯定的な意見が多かった。

・文脈の中でより適切な動詞が見つかった。

・そのまま使える表現が分かった。

・サジェストのフレーズによって次に続ける内容がわかった。

・他の論文中でどのように使われているのかわかりやすかった。

などである。AUSuM のシステムに関して肯定的なものは,

・ある動詞に続く前置詞を検索したところ次々とフレーズが出てきた。

・候補のフレーズの数が多いのがよかった。

・キーワード検索が便利だった。

・同じページで Google 検索もできるのが便利だった。

などの意見があった。改善点としては,

・候補のフレーズが意味のまとまりで表示されるとよりわかりやすい。

・日本語訳やニュアンスの違いも知りたい。

・スペルミスがあるときにその表示がされると良い。

・ワイルドカード検索を行ったがうまくいかなかった。

などが指摘された。

AUSuM は論文中の各ムーブ・ステップにふさわしい表現を提示し論文執筆をサポートすることが本来の目的だが，AUSuM の使用によって，気づきも起きていることが明らかになった。これらの気づきは，(a) 文法や句読法に関するもの，(b) ジャンルを意識したもの，(c) 語連鎖を意識したもの，(d) ムーブ・ステップを意識したものに分けることができた。文法や句読法に関するものとしては,

・動詞や前置詞，冠詞の選択の間違い，スペルの違いに気づいた。

などがあった。ジャンルを意識したものとしては,

・知っている表現が学術論文でも使われるのか確認した。

などが見られた。語連鎖を意識したものとしては,

・3L にして検索したためより文脈にあったフレーズが得られた。

・3R で得られたフレーズの名詞部分を入れ替えて使用した。

などがあった。ムーブ・ステップを意識したものとしては,

・Move, Step を選択し most frequent に出てきたフレーズを使った。

などがあげられる。

全体の感想としては，論文執筆に際して苦労の様子がうかがわせるものも多く寄せられた。例えば,

・自分の語彙力だけで書こうとすると同じような表現や単語を使ってしまう。

・簡単な表現でもいざ書こうとすると思い出せなかったり使えなかったりする。

などである。また，情意面において，英語での論文執筆に対する抵抗感を下げる効果があったことを示すものとして,

・AUSuM を使用後はより論文らしい英文を書くことができそうだ。

・自分で考えて書くよりも速くかけそうだ。

・知らない単語でもほかの論文で使用されている単語だと安心して使える。

・だんだんパターンが分かってきてよりスムーズに書けそうだ。

などが見られた。

アカデミック・ライティング指導の立場からは，ムーブ・ステップに沿って頻出表現を使って英作文をすることについては，賛否が分かれるところであろう。しかし，今回の感想に見られるように，論文執筆に際し学生たちはかなり苦労しているようだ。AWSuM をムーブ・ステップに意識を向けさせる足場かけとして使用し，執筆，情意両面のサポートをすることは少なくとも論文執筆初心者にとっては正の効果の方が大きいと推測できる。このような理由から, AWSuM 使用の効果については今後も研究を継続する必要があるといえる。

おわりに

タグ付け作業を行った学生・AWSuM を使用した学生へのインタビュー結果から，タグ付け作業，あるいは AWSuM 使用によってムーブおよび語連鎖への意識が高まったこと，そしてその結果，論文執筆への抵抗感が低下したことが示唆された。現在，ESP 実践ではジャンル意識を高める目的でムーブを意識させる活動が行われているが，さらに語連鎖にも注意を向けることの有効性が，本稿の AWSuM 使用の感想から示唆されたと言えるだろう。今後は AWSuM の実践での活用が期待される。

引用文献

Chang, A. (2010). The effect of a timed reading activity on EFL learners: Speed, comprehension, and perceptions. *Reading in a Foreign Language 22*, 284–303.

Hyon, S. (2001) Long-term effects of genre-based instruction: A follow-up study of an EAP reading course. *English for Specific Purposes 20,* 417–438.

Pho, P. D. (2013). *Authorial stance in research articles: Examples from applied linguistics and educational technology*. Basingstoke, UK: Palgrave Macmillan.

付録　インタビューで用いた質問項目（Hyon, 2001 を基に作成）

1. 過去1年間にどのような授業を受けました？授業外では修士論文などの研究に関わってきましたか？
2. 授業や研究でどのようなものを読みましたか？
3. 授業や研究でどのようなものが読むのに難しかったですか？
4. 難しかったときにはどうしましたか？そのときどのような手段や戦略を使いましたか？そのような方法を使ったのはなぜですか？
5. 読む速度はどうですか？この 1 年間で，授業のために教材を読む時，速度が上がったと感じますか？
6. 授業外で学術に関係しないものを読んでいましたか？ どのくらいの時間読んでいましたか？
7. 学術に関係しないもので難しいものはありましたか？なぜ難しかったと思いますか？
8. （7.で難しいものがあった場合）難しかったときにはどうしましたか？そのときどのような手段や戦略を使いましたか？そのような方法を使ったのはなぜですか？
9. 読む速度はどうですか？　この 1 年間で，学術に関係しないものを読む時，速度が上がったと感じますか？
10. 作業中に意識していたことをすべて言ってください。
11. 論文や学術関係の文書を読む時に，作業で身につけたことを活用していますか？どのように活用していますか。
12. 新聞など，学術に関係しないものを読む時に作業で身につけたことを活用していますか？どのように活用していますか？以前はしていなかったが，現在していることは何ですか？
13. 英文読解に関するスキルで，これから身に付けていかなければならないと思うものはありますか？
14. 過去一年間の作業を通して，自分の英文読解に関して何か気づいたことはありますか。